
テンプレ異世界物語を神の視点で見る。

水上鈴（みなかみれい）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレ異世界物語を神の視点で見してみる。

【Nコード】

N3036M

【作者名】

みなかみれい
水上 鈴

【あらすじ】

ありきたりなテンプレ異世界物語を勇者視点ではなく神々の視点から綴るだけ。何が起こるかも、神も天も（作者も）知りません。いきあたりばったりな勇者に悪態をついたり、おちよくる神をご覧ください。それではごゆるりとお楽しみください。

ぼちぼち、転生ネタを取り入れようと転生ネタに向けて執筆中。
できたらいいなあ

基本的に毎週火曜日更新。タブンネ。

ストーリー性は1ミクロンありません。あしからず。ココ重要。
テストに出ます。

設定集（前書き）

連載が不定期です。

設定集

これは中世の世界をモデルにした物語。 テンプレ通りの物語を勇者やその仲間たちの視点ではなく、

召喚した神の視点で見えてみる一風変わった小説。

中身は要約すると和気藹々と進んで行く勇者一行に悪態をつく創造神に、

神のテンプレルールなどおかまいなしに干渉したりひっかきまわしたりする神たちの観察日記です。

まあ、片手間で読む暇つぶしになりましょう。

以下、設定集

世界について

モデルは中世の世界。

にもかかわらず、中世以降のものやそれ以前の時代の産物が登場したりととにかくカオス。

大陸は一つ。泥だまを落としたような楕円形に近いゆがんだ形の大陸ディエンス。

日本に似ている列島や数え切れないほどの辺境の島々も存在する。

神々について

多神教でそれぞれの神が直轄領で人間が侵入できない場所、「聖域」が多数存在する。

火の神の聖域は火山など……

種族について

人間に始まり、エルフなど数えればきりがなほどの生き物が生息する。

かなり高い知能を持つ種族もいればそうでない種族もある。

ちなみにロストテクノロジーの類はない。

キャラクター

創造神

アウグストウス 男 18くらい

黒目黒色でボサボサでフワフワしたくせのあるショートヘアを無造作にそのままにしている。

顔だけ見ると女に間違われるくらいの女顔。おもしろいくらい典型的な日本人の顔をしている。

イケメンでもなく、かといってブサイクでもない平凡な顔とかであり人に覚えてもらえない。

176cmでちょっと高いところにてが届くのがささやかな自慢。オタクでかなりいろいろ詳しい。ちなみに一番好きなのは「なく頃に」シリーズ。

アウグストウスの名前は自分の名前を忘れたから適当にこれでもいいやと思い、名乗っている。

どうでもいいが本名は吉崎結理^{よしかぎむすひ}。

女っぽくて恥ずかしいと思う思春期真っ盛り。

桜花

14〜16歳くらい 女 158cmくらい

22〜24歳くらいに変装すると164cmくらい 体重は不明だがかなり軽い

艶やかな藍色の髪の毛をうなじのところでオレンジのゴムでひとつにまとめている。

紺色のスーツに黒色のマントにシルクハットに銀縁の伊達メガネ。クール系で沈着冷静。何事に関しても傍観者の立場にいる。

普段はボーカフェイスで他人をからかうのが好き。口調は常に敬語や丁寧語の時や、

子供っぽい口調などその時による。

左耳に青い薔薇のピアス。ちなみにサファイア。

桜の紋様の刻まれた銀の懐中時計をいつも持ち歩く。

顔は小さめで、少年のようにも少女のようにも見えるが、やや高めの声で女と判別できる。

基本的には、きまぐれ。まるですべてを知っているかのように振る舞い、時には大人な女性、

ある時は少年のように、あるときは深窓の姫のように振る舞い、

その場の雰囲気や話す人によって態度などをころころ変えて人をはからかう。

胸はないが、詰め物をしたり、男装をしたりとそのときの気分により服装も変わる。

メガネは銀縁だったり、ふちなしだったり、似通ったタイプの伊達メガネを複数所持している。

気に入ったか、心を許している人のみ名前で呼ぶ。本人も気がついていない癖。

真夜^{マヤ}

153cm、かなり軽い。

どこかにあり、どこにもない館の主。赤いリボンをカチューシャのようにつけて、

装飾の類の一切ない黒いワンピースに白いハイソックスに小さな赤い靴。

首には頭のリボンと同じ材質の赤いリボンをチョーカーのようにつけている。

赤い車椅子に座り、生気のない眼で物事を見つめて淡々と生きている。

口数も少なく、必要最低限の言葉のみで考えていることは不明。一

人称は私、二人称はあなた。

設定集（後書き）

これからどんどん増えて行く予定です。
2011 1 23 追加。

はじまりはいつも唐突に（前書き）

これから小説には何らかのネタがはいります。皆さんには見つけれ
るでしょうか。

はじまりはいつも唐突に

何もない漆黒の空間で佇む青年が一人。

白いローブを身にまとい、ただ一点を凝視する。

彼が行っている行為は誰かをもしくは、何かを待つという行為だった。

「待たせてすまんのう」

青年の背後から160cmほどの豊かな白ひげを蓄えた翁おきなが現れる。

「なあ、じつちや。オレはどれくらい待ったんだ？ここには時間の概念がないからわからねえ」

べつに動じた風もなくふりかえる青年。

この老獪な翁に親しみを感じているようだ。

「それほど待つてはおらんよ。10分くらいかの？」

「そうか」

「実はの、そっちで転生してほしい人間がいるんじゃないよ。二人ほどな。男二人じゃ」

「どんなやつだ？」

「おまえさんの人間時代の知り合いじゃ。それとも悪友と言ったほうが正しいかのう」

「……ってことはアイツらかよ。よりによって史上最低最悪のやつらを……」

青年は思いっきり顔をしかめて悪態をつく。

その後もできるかぎりの抵抗を試みるも虚しく、青年の負けとなった。

「ったくしゃーねーな。転生させたあとは何やってもいいんだな？」

「かまわんよ。あと事故死に見せかけて殺してはいけんがの」

「ちっ、他人の心よみやがって」

「ふおっふおっふお。それではの。後で送り込むからよろしくたのむぞ」

「あいあい。やりゃーいいんだろ」

なげやりになる青年をよそに翁は別れを告げるとすぐさま屋気楼のように消えた。

はじまりはいつも唐突に（後書き）

これから、「テンプレ異世界物語を神の視点で見てみる。」、略してテンプレをよろしく願います。

それでは、またどこかでお会いしましょう。

けして作者名をググったりしないでください。

この世界の基礎理論と内包事情（前書き）

サブタイに意味はありません。基本的に。あしからず。

この世界の基礎理論と内包事情

神や天使の住まう天界の中心、八角形の三重の城壁に囲まれた城、
八角城。はっかくじょう

一番外側の区画と城壁は中華風で下級の天使が住む。

外から二番目の区画と城壁は洋風で上級の天使が住む。

中心の区画と城壁は和風で神々の居住区。

その神の居住区の端、小さな庭園の東屋で机に突っ伏して寝る青年が一人。

先刻、老獺で愉快な翁に頼みごとを任されてうつになり現実逃避のうちに寝てしまったようだ。

彼の名はアウグストウス。この世界の創造神。

典型的な日本人の容姿と気質を親から受け継いでいるので異世界では珍しがられる。

「おい起きろ！アウアウ！観劇の魔女って呼ぶぞ！」

「らめええええ！著作権に問題があゝっ！」

水色の長髪をポニーテルにした長身の褐色の肌の青年がアウグストウスを揺り動かし、叫び、起こす。

跳ね起きたアウグストウスはかなり現実的な指摘をしてあわてる。

アウグストウスはぶつぶつぶやいてから空間にゆがみを生じさせてゆがみの向こうへ消えた。

優しいのだろうか、酷くて外道なのだろうか。（前書き）

さて、問題です。このお話にネタは存在するでしょうか？

わかったらこれだと思っ部分を書き、「」のところがネタですか？

みたいな形で回答してみてください。

先着一命の方に小説を書かれている場合は邪魔するか、リクエストでひとつだけいつかは不明だけど短編を書くかもしれない。

なおこのネタ探しは完結するまで続きます。

優しいのだろうか、酷くて外道なのだろうか。

漆黒の空間で二人の少年が騒いでいるのが見えてアウグストウスは青筋をたてた。

「あんにやる！昔はいつも迷惑なことしやがって！復讐の時間だ」
遙か上空で呪詛にも似た言葉をつぶやくと、空間の切れ目から

一振りのロングソードを亜空間に存在する収納スペースから取り出した。

「うおおおおお！見せてやるよ黄金の夢ってやつをよおおお！約束エクスカリバーされた勝利！」

無駄に叫びで怒りを表してみたりした。

全力で振り下ろすと衝撃波が光を伴い少年たちの間に炸裂する。

感情を吐露してすっきりしたところでオ・ハ・ナ・シタイムに強行突入した。

「よう、ひさしぶりじゃねえか？ド畜生で外道野郎」

いつのまにやら自動販売機を左手に担ぎ、

右手に道路標識を持っていて怒りのボルテージマックスのアウグストウスに

少年らはスライディング土下座していた。

「あの時はすみませんでしたあー！」

「ごめんですんだらケーサツはいらねんだよ！ああん？わかるよな？」

ガクブル状態で怯える二人に自販機と標識を捨てて殴りかかった。

ーーーー以下、音声のみでお楽しみください

バキッグシャツ。

「ギャアアアア！」

「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ、ゴメンナサイ……以下、エンドレス」

ふおんぐしゃ。

「あべしっ」

「あははははは！楽しいね！楽しいね！」

「いやだああああ！」

一時間後、満足そうな笑みを浮かべて簀巻きにした少年らに理不尽

な言葉をかけた。

「お前らには並以上、伝説級以下の魔力と剣の才能をやる。剣術とか魔法は自力で覚えろ」

「嘘だ！こういうときは最強にしてみらえるはずなのに」

「じゃーなあ」

指をパチンと鳴らすと黒い穴が出現に落ちていった。

「さてと、帰って風呂でもはいるか」

数瞬後、だれもいなくなった。

優しいのだろうか、酷くて外道なのだろうか。(後書き)

ちなみにネタは四つで完答をお願いします。
ひとつでも間違っていると意味はありません。

それはそれでいいと思うよ。たぶん。（前書き）

評価してくださったかた、お気に入り登録をしてくださったかた、
ありがとうございます。これからも精進いたします。

それはそれでいいと思うよ。たぶん。

神々や天使の住む天界の八角形の城の最深部に存在する創造神アウグストウスの私室、

部屋の創造主のみが入れる部屋に天使でも神でもないひとがひとり。まつすぐでつややかな長い藍色の髪の毛。色白で小顔の中世的な顔つき。

ほっそりとした体つきにかすかな胸のふくらみから女性と断定できる。

見た目から推し量った年齢は十代半ばから後半。

黒いノートパソコン、机、白いベッド、木目の美しい本棚程度しかない畳のシンプルな部屋。

無印良品あたりに売っていきそうなベッドでその少女は寝ていた。

さりげなくテーブルにふちのないメガネが置かれていた。

そつと音もなく、部屋の主が現れて少女に近寄り優しく唇にキスをおとした。

慈しむ様な、愛おしい者を見る目で見つめる。

長い指どおりのいい髪の毛をもてあそんだり、髪の毛にキスしてみたり。

その後すぐ恥ずかしいことをしてもだえる光景は第三者が存在すれば甘酸っぱい青春時代の恋で、

若気の至りと捉えられるだろう。

しばらくは目覚めるのを待っていたが、いつの間にか寝入ってしまった。

優しい風が部屋を通り抜けた。

青春？なにそれおいしいの？あと、リア充は全世界から滅べばいいのに。

黄昏^{たそがれ}が終わりを告げて夜の帳が降り始めるころに、寝入った二人が起きた。

某ホラー映画の着信音がちゃぶ台の上の黒いケータイからして、寝ぼけながら部屋の主の黒髪の青年が

ケータイを掴み取り電話に出る。

「もしもし」

「もしもし。青龍^{せいりゅう}だ。メシつくね。何時だと思ってる！白虎は暴れるし、

玄武はイライラして手がつけれないし、朱雀は料理で暗黒物質^{ダークマター}作るし。

おまえがいないと収集がつかない！早く来い！」

一方的に伝えてから切られて、理解に数秒かった。

「どうしたの？アウラ」

藍色の髪の毛の少女がちゃぶ台に無造作に置いたふちのないメガネをかけながら問いかける。

「桜花、やっと起きたか。かなり寝てたぞ」

「まあね。神経すり減らすような取引とか命のやり取りとかばっかりだし。」

「ここが唯一の安息の場だね」

「はははっ。そう言ってもらえそうれしいな。……で
も、死ぬな。」

桜花は独りじゃないから。もう大切な人がいなくなるのはいやだから」

「うん。約束するよ。ボクはかならずここに無事に帰るよ。」

そして笑顔でただいまって言ってアウラをだきしめるから」

「いつまでも待ってるから。たまには恋人らしくキスぐらいしてほしいけどな」

「あとで、ね」

「あ、そっだ。食べるか？」

「いらないよ。おなかすいてないし、携帯食料あまってるし」

「じゃあ、あとで」

そっと引き戸を閉めて出て行った後姿を見つめてからまた眠りに落ちていった。

青春？なにそれおいしいの？あと、リア充は全世界から滅べばいいのに。(後書

桜花がアウグストウスをアウラと呼ぶ理由は、

あだなのアウアウやアウローラを縮めてアウラにしたから。

ドラゴンってかっこいいよね。あと、夏休みの宿題っていやだよな。

八角城の中心部にある食堂の細長いテーブルに座る五人の男女。

お誕生席にあたる席ははまだ空白で、お誕生席から見て右側に15歳前後の

美しくもかわいらしい輝く長いブロンドのくちなし色のドレスの少女が、

テーブルに突っ伏してねてしまっている。

向かい側の蒼い部分鎧を身につけた褐色の肌に水色のポニーテルの青年が、

ロングソードの手入れをしてる。

青年の隣には、

白い肌が引き立つ胸元の大きく開いた緋色の着物のセクシーなお姉さまが、

結い上げた真紅に所々オレンジや黄色のメッシュのはいった髪の毛をいじっている。

セクシーなお姉さまの向かいには、

10歳ほどのショートの白い髪の毛の中に黒いメッシュのはいった

生意気盛りの男の子が退屈そうにあくびをしていた。

テーブルの末席、セクシーなお姉さまの隣には、

ショート黒髪黒目の12、3歳ほどのおとなしそうな少年が静かに何かを待っていた。

ドラゴンってかっこいいよね。あと、夏休みの宿題っていやだね。（後書き）

しばらく投稿しなくてごめんなさい。

作者はグロテスクな描写にはこだわりと定評があります。あと妥協しません。ダ

アクセス千人超えていました。ありがとうございます。

ユニークは五人を超えました。これからもよろしく願います。

あと、グロテスクな描写があります。注意してください。

作者はグロテスクな描写にはこだわりと定評があります。あと妥協しません。ダ

黄金色の満月が優しく照らす路地裏。

非合法的取引や夜の蝶が艶かしく客引きをするような汚泥やごみが散乱する道に六人の男が、

十七人の人種のさまざまな子供たちが鎖につながれて連行していた。

数キロ先には非合法の奴隷の市場があり、男たちは奴隷の卸売商人のようだ。

子供たちの顔はどこまでも暗く、目に光がなかった。

道の先、男たちの向かう先からかわいらしい透明感のある子供の歌声が聞こえた。

明るく楽しそうに歌う声の主がはっきりと視認できるまで接近すると先頭の男が腰を抜かした。

立ち上がったときの高さが耳を含めないと150cmほど、

耳を含めると160cm強のこげ茶色の野兎が首にシンプルな真鍮製の装飾の懷中時計を

真鍮の細い鎖でネックレスのようにして首にかけて飛び跳ねながら歌っていたのだ。

急にウサギが止まり、嗤^{わら}った。

そして灰色の石畳を蹴って姿を消した。

次の瞬間、薄汚い路地裏に赤黒い液体が飛び散った。

先頭の男の胴体のみが崩れ落ちる。

転がり落ちた頭は返り血をべったり浴びたウサギが右足で軽く踏みつけた。

恐怖がこの場を支配し、誰も動けなくした。

いつの間にかウサギが、160cmほどのふわふわの外ハネのきついこげ茶のショートヘア

の色白のかわいらしい少女に変身していた。

さらにウサギだった少女は人を殺める^{あや}ことに快感をおぼえ、愉悦に顔が歪^{ゆが}む。

頭部を蹴り上げて白い華奢な手でつかみ、造作もなく握りつぶした。

左手に血塗られた漆黒のナイフを手にもた嗤^{わら}った。

白い頭蓋骨、赤い血肉をぶちまけてぐちゃりと粘着質な不快感をたてて少女の右手から滑り落ちる。

脳が石畳に落ちきる前にすべての男たちが死んだ。

ある者は原形をとどめずミンチに、ある者は頭と四肢を切断され、

ある者は体の部位ごとに解体され、ある者は首を捻じ切られ、

あるものは魔法で出現した炎で消し炭になった。

またもや、グロ注意です。（前書き）

更新が滞った理由はポケモンのホワイトを攻略してました。発売日からこの話を投稿した秋分の日の前日まで。たまだいま、四天王戦の仲間です。レベルがぜんぜん足りません。ただいまレベルアップ中。

またもや、グロ注意です。

ウサギが何もない空間にくるりと手を回すと空間に黒い穴を開いた。

その中に時計を大事そうにしまうと、手をパタパタ動かして穴をかき消した。

かき消してから、死体の残骸をかき集めて、ズタズタに引き裂いて血の海を作り上げた。

そして狂気に塗れた嗤^{わら}いをあげる。

そして血の海に盛大にダイブした。

水浴びならぬ血浴びを数分で終わらせて、また空間に穴を開けてきれいな水を取り出す。

水を魔法で操り簡単に水浴びをすませた。

それからウサギは捕らえられていた人間の子供のみを適当な孤児院の中に置き去りにし、

その他の種族の子供のみを転移魔法で自らとともに何処かへと転移した。

なぜか拘束を解かないままで。

こうして、血濡れの惨劇は幕を閉じた。

神話です。この物語の。（前書き）

こつ見えても創世神話なんです

神話です。この物語の。

創造神である主神の男神アウグストウスがはるか遠方より来^{きた}ると
き、

世界に形はなく、原初の混沌のみが存在した。

神は原初の混沌をその御手でかき混ぜ、下方に大地を、海を、生
物を、上方に空を、

神々や神のみ使いが住まう世界を創った。

世界と同時に他の神々や世の理^{ことわり}を創り、世界各所に力のあふれい
づる世界樹を植えた。

すべてを創り終えると神はしばしのうち始めに人をつくった地で
すごしたのち、他の神々とともに

神の住まう世界へ旅立った。

エリユシオン創世神話 子供向け現代語訳版

他にも多数知識人向けや見習い神官のための創生史書など多数出版
されている。

多神教なので少々解釈や注釈に違いが見られる。

注意、エリユシオンとは楽園を意味する。この物語の世界の名前。

爪弾いた子守唄が悲しき離別を歌う

八角城の中心部にある食堂の扉が静かに開かれた。
はつかくじょう

柔和で慈愛に満ちた瞳のこの世界の主、創造神アウグストウスが学ラン姿で現れた。
エリュシオン

足音をたてずに衣擦れの音のみをさせて、陽だまりのような淡いあたたかいほえみを先に着席

していた者たちにむける。座っていた者たちはそれにつられてほえむ。

アウグストウスはひまわりいろのドレスの少女に近づき、優しく声をかけてそつとゆりおこす。

「ほら、起きて……やっぱり起きないね。部屋に運んでおくから先に食べていいよ」

少女を起こさないようにお姫様抱っこした世界の主は待っていたことを配慮して来た時と同じように

音も立てずに寄木細工装飾の扉を手を触れずに開き、ゆっくり閉ざした。

彼は、扉が完全に閉まると瞬間移動で少女の部屋の手前へ移動した。
テレポーション
真鍮のドアノブを回し、淡い黄色を基調とした女の子らしいぬいぐ

るみやおもちゃや美しい絵本が

適度にちらかった子供部屋が二人をでむかえた。

部屋と同じ淡い黄色の薄くやわらかいシフォンを幾重にも重ねた天蓋つきのベッドへと

抱えていた少女を寝かせ、かかった前髪を払い、掛け布団をかけた。

そして、一仕事を終えた彼はつぶやいた。

「おやすみなさい。良い夢を」

そして音もなく扉が閉まるとともに彼の姿も何処かへと消えた。

爪弾いた子守唄が悲しき離別を歌う（後書き）

どなたか、コラボしてくださる方を募集しています。

観る者、運ぶ者、歌う者、抗う者、信じる者。

アウグストウスは食堂の前の扉まで魔法で移動してから、手で扉を開けた。

席にも着かずに、温和な声色と顔でこう告げる。

「やることがあるから、今日は食事はいらないよ。ごめんね、急に呼び出したりして。」

朱雀、ごめんね。いつも無理させてしまって」

緋色の着物の女性を優しくいたわる。

「いえ、そんなことはありません。いつものことです」

おっとりとした温かみのある声が返ってきた。

「青龍、いつもすまない」

ロングソードの手入れをしていた青い部分鎧をつけた青年からそっけない返事が返ってくる。

「いつものことだ。気にするな」

「玄武、白虎は？」

先ほどまでいた生意気盛りの少年が見えないので問うた。

黒髪のおとなしそうな少年が落ち着いた冷静な声で淡々と事務的に答える。

「もう、食事を済ませて持ち場へ」

「わかった。ありがとうみんな」

そう言って、またどこかへ消えた。

観る者、運ぶ者、歌う者、抗う者、信じる者。（後書き）

なかなか進みません。自分の腕が悪いからなのか。ほんとうにすみません。

君に今あえて問おう（前書き）

テストがあるので更新はしばらくお休みです。

君に今あえて問おう

質素な柿渋の扉を開けると、質素な調度品と黒檀の机とイスのみの執務室と

ドアのネームプレートに打刻された部屋にはいった部屋の主、アウグストウスは黒い革張りのイスに

腰を下ろした。

そして、虚空に指で大きな正方形を描くとうす青い液晶パネルのようなものが出現した。

まもなく、パネルに映像が映し出される。

パネルを四分割すると、別々の映像が映し出される。

しばらく画面を見つめると紫檀のサイドテーブルの上に置かれた黒電話が鳴る。

すばやく立ち上がり電話を取る。

しばらく話を聞いて、僅かに口角を上げて笑うとふらりと出て行った。

かすかな足音のみを残して城の出口へと歩いて。

散歩を気取りながら。

君に今あえて問おう（後書き）

親戚の小説とコラボ予定ですが、今のところテストのせいで保留です。

だから、それを選んだ。

天界の、樹海しか存在しない大陸の中心に淡い青白い光を放つ大樹があった。

赤いリボンをカチューシャのようにつけて、装飾の類の一切ない黒いワンピースに

白いハイソックスに小さな赤い靴、首には頭のリボンと同じ材質の赤いリボンをチョーカー

のようにつけている15〜16歳ほどの少女が赤い車椅子に座り、

生気のない眼で樹海の中の淡い青白い光を放つ大樹を見つめている。

大樹には、二人の女の子と一人の男の子が思い思いの場所で寝ていた。

三人とも10歳くらいで、男の子は大樹の根元で、

女の子二人は大樹のうろの中と大きな枝の上で寝ていた。

少女は数分ほど大樹と子供を見つめてから夜霧に紛れどこかへと消えていった。

少女の行方は誰も知らない。

少女が去ってから、大樹に一つの小さな白い花が咲いた。

リア充なんて・・・リア充なんて・・・（前書き）

ただいま、リア充撲滅キャンペーン中です。うそです
それでは、ストーリーはいます。

リア充なんて・・・リア充なんて・・・

体長が1.5mほどもある真鍮の懐中時計を首にかけた大きなノウサギは神々の住まう

世界の淡い光を放つ大樹を中心とした森にたっていた。

連れてきたはずの子供たちはどこにもなく、ノウサギはぴよぴよこと森を跳ね回る。

淡い光を放つ大樹ほどではないが、そこそこ大きな樹の大きなうろに入り込んだ。

そして、そのままノウサギは眠りに落ちていった。

その様子を赤い車椅子に乗った15〜16歳ほどの黒いワンピースの瞳に生氣のない少女

が無言で音もなくやってきては黙ってその行動を見つめてはすべるように車椅子が動き、

また霧深い森の奥へと消えていった。

しばらくしてから、ノウサギは起き上がりするりとうろから這い出て霧の奥へとまたもや

消えていった。

リア充なんて・・・リア充なんて・・・（後書き）

それでは、よいお年を

リア充爆発！！

次はどこへ行くのか

白い霧が黒い微粒子に変わり、黒い粒子が集まり紅い車椅子の黒いワンピースの少女となって

この世界「エリュシオン」の主（主）アウグストウスの部屋に現れた。

しばらくシンプルな部屋を見回すと唯一の出入り口のシンプルなドアが開いた。

「アウラ（アウグストウスのあだ名）は今はどこかいったよ」

紅い車椅子の少女はくると振り向くとそこには黒いマントに紺色のスーツで黒いナイフを

左手で弄ぶ藍色の髪の毛の少女桜花がいた。

「…………ひさしぶりね」

つぶやくように小さめな声で紅い車椅子の少女が必要最低限の言葉で挨拶した。

「あははっ。いつもと相変わらずで元気そうだね、真夜^{マヤ}」

桜花がまるでいたずらに成功した子供のように無邪気に笑いながらかえした。

「そう？あまりかわらないけれど」

紅い車椅子にのった真夜は静かに言い放つと桜花はおもちゃに飽きてしまい、

興味を無くした子供のようにすぐに表情を変えてドアを閉じながらこういった。

「ふうん。おもしろくないや。まあいいけど、帰ってくるまでに色々みてまわったら？」

ぱたんとドアが閉じられてから真夜はまたつぶやいた。

「相変わらずきまぐれね」

真夜は車椅子の端っこからさらさらと粒子になり、またどこかへ消えていった。

選んだ道の先にあるものとは何だろうか。(前書き)

おひさです。

選んだ道の先にあるものとは何だろうか。

エリュシオンとは離れた空間。どこにでも存在し、どこにも存在しない空間。

そんな空間と空間の主^{あるじ}のお話。

シャンデリアのオレンジの温かみのある光が照らす重厚なつくりの洋館のエントランスホール

に変化が現れた。

大きなシンメトリー細工がされている金メッキ細工のついた鏡の前に黒い霧が集まりだした。

黒い霧は人の形を少しずつとり始め、数分後には紅い車椅子に座った少女に変わった。

自らの手で車椅子を動かしながら横に長い屋敷の奥へと消えていった。

車椅子の少女が消えると鏡がぐにやりと歪んで見え、鏡から人が現れた。

鏡の向こうから人が現れるとシャンデリアの蝋燭がひとつ消えた。

出てきた人がホールの赤いフカフカの絨毯を一步踏みしめると

風もないのに、灯火ともしびがゆらいで消えてしまった。

出てきた人も奥へと消えると、

そこには長い白いレースのついた赤いリボンに結び付けられていた銀の鈴が落ちていた。

今、そこには誰もおらず、鈴が落ちていることは誰も知らなかった。

それが必要ならば何も問いはしない

「ライ」

ひんやりとした空気が張り詰める切り出された青みがかかった灰色の石の地下牢獄に

名前を呼ぶ声が響いた。

しばらく名前を呼びながら車椅子を動かすと赤い車椅子に乗った黒いワンピースの少女、

真夜^{マヤ}は大広間の様な場所にいきついて、誰かを待っていた。

しばらくすると風のない閉ざされた空間のはずなのにわずかなまぬるい風が吹いてマヤの

向かい側に渦巻く。

やがて風が渦巻くのが終わるとぼんやりとしていて体が透けて見える5、6歳ほどの

女の子がふわふわと宙に浮かびながらくすくすと狂気じみた笑い声を上げながら薄気味悪い

笑顔を振りまいていた。

「ライ。ウソツキだからLie（嘘）なんて安直じゃない」

マヤが幽霊の女の子、ライに問いかけるとライはおかしいといった
げにさらに嗤う。

ひとしきり笑い終わるところ答えた。

「それがいいじゃない。私は嘘が好きなんだもの」

とある嘘つきのおはなし

それから、天井のシャンデリアをブランコのようにゆすって遊んでいたライはやがて飽きてしまった

のか宙返りしながら着地してすぐにゆらりと消えていった。

はあ、とため息をついて問いかけたマヤは無駄足だったといまさら理解して体を黒い粒子に変えて

地下室から消えていった。

黒い粒子が集まりだし、マヤが出現したのは質素で少し広めの自室。

そこには人がいた。正確には人外が存在だが。

部屋の主に断りもなくくつらいでいたのは、異世界の神に不本意になっってしまったアウグストウス

と深緑の色の髪と目をした執事のような若い青年がのんびりと紅茶とお菓子を楽しんでいた。

そのことを気にせずマヤは二人に話しかけた。

「聞きたいことがあるの」

タちゃんっていくつだっけ？

「聞きたいことがあるの」

お茶会を楽しんでいる二人に近づいて問うた。

「何？どうしたの、マヤ」

紅茶を飲み終わってからアウグストウスはマヤのほうを振り向いて言った。

「どうかいたしましたか？真夜^{マヤ}さん」

深緑の髪的青年が給仕の手を止めてマヤのほうを向く。

「マキ、こっちにきなさい」

アウグストウスと共にいた真夜にマキと呼ばれた男性が真夜につれられてどこかに消えていった。

「あらら。どうかいっちゃった。でもまあいいや」

のんびりと独り言をつぶやいてからアウグストウスはまた紅茶をすすった。

そしてひとりつぶやいた

あらかたアウグストウスが茶菓を食べ終わると先ほど退室していった二人を待つことにした。

静寂が支配する空間で残り少ないカップに入った紅茶を見つめながら待つ。

あたりを時折見回しては変化がないか探す。

部屋の片隅の大きな柱時計が一時間が経過したことを示してもまだ変化は現れなかった。

「暇だなー………あ、いい事思いついた」

ぐいっと紅茶を一気に飲み干して立ち上がると、

部屋の北側の大きなクローゼットをスライドさせた。

すーっつと音もなくレール付きキャスターのようにタンスが動くと赤茶色の扉があった。

タンスの奥の隠し扉をあけて意気揚々とアウグストウスは扉の向こうへと消えていった。

扉が閉まる戸と同時にひとりでにタンスが元の位置に戻った。

うたうたいの歌を形にして忘れぬように、色褪せぬように、どこかに隠してしま

隠し扉の向こうは夕日の差すほんのり薄暗いずっと奥まで続く書庫だった。

その書庫のなかをゆっくりといらぬ埃を立てぬように歩きながらアウグストウスは

書庫の棚の本の背表紙をみつめて一人つぶやく。

「けっこう本が増えてる。さすが夕日の無限書庫、所蔵量に制限なんかないね」

つぶやいてから少し歩くと閲覧コーナーなのか大きな四角いテーブルと

質素なイスが並べられている。

テーブルの上のランプが読書には差し支えないほどの光源を確保している。

気になった適当に本を数冊選び取りイスに腰をおろして読み始める。

壁の柱時計が時を刻む音とアウグストウスが本のページをめくる音だけが書庫にこだまする。

やがてテーブルに並べたすべての本を読み終わる頃に

己以外の人の気配を感じ取ったアウグストウスはゆっくりと本を閉じながら振り向いた。

ひまわりの種をチョコでコーティングしたやつっておいしいよね。

「あ、マヤ。ひさしぶり。元気？」

「ひさしぶりね。変わらないわ。何もかも、ね」

再会をよろこんだアウグストウスとは反対に無表情で無愛想のマヤ。

「面白い物語ばかりでついついずっと読んでたんだ。ごめんね」

「別に、気にしてないわ。」

それにこれらはライフワークだから。このためだけにこの館をつくり、書き続けた。

私自身の願い故にこの足になっても今は後悔していない」

「はははっ、マヤは強いねえ」

きつぱりと言い切るマヤに驚嘆して力が抜けたようにどさっと椅子に座り込む。

「アナタのほうが強いのに」

「ボクはそれほど強くないさ。妻の桜花やさがせば強いやつなんてごまんといる。」

強さの意味は違ってね」

窓からさす夕焼けの光が帯となって二人を覆う。

やがて二人の間に会話はなくなった。

はらりと落ちた

「さて、ボクはもう行かなくちゃ。待っているから」

彼はよっこらしよ、と親父くさいセリフをつぶやきながら立ち上がった。

「あらそう。ヒマになったらまたいらっしゃい。待っているから」

無表情で声色も変化しない彼女はひらひらと右手をふった。

「わかった。ボクたち（人ならざる者）の時間は長いから、

再会までのときが刹那の一瞬に感じられる。また読みにくるからそれまでたくさん書いてね」

ひだまりのようなあたたかさを持った微笑を真夜^{マヤ}に向けて

存在も姿も揺らぐように消えていったアウグストウスは期待の言葉を残して

痕跡すら残さなかった。

「きまぐれで包み込むような優しさを持ったひとね」

黄昏の光の中で独り言をつぶやいては彼女もまた黒い霧に姿を変えて消えた。

だれもない図書館のような空間には赤い革の表紙の本だけが残った。

そして幸せなんてどこにもないと知った。

だれもない壁の不安定なランプの光源だけで満たされた長い緋色の絨毯の廊下を一人歩く。

どこにでもいそうな平均的で典型的な日本人の少年、ペンネーム『アウグストウス』は

黒い学ランに着替えて浮かない顔で足取りも重かった。

「遅くなっちゃった・・・妻と子供たちになんて言い訳をしようか」

独り言が廊下に溶けて消えた。

ポケットから竜胆りんとうの彫刻が施された銀の懐中時計をとりだして時刻を確認した。

「完璧遅刻だ。3時間の大遅刻。どうあやまろう。オーソドックスに土下座？」

さらに独り言を玄関まで言い続けた。

ゆっくりと非力そうな彼は二メートルは軽く超える大きな扉を自らの手で開いて帰っていった。

「贅沢ね。待つ人がいるなんて」

いやいやながら帰るアウグストウスのその姿をどこかうらやましそ

うに

赤い車椅子から屋敷のあるじは見ていた。

扉が完全に閉まる直前に素直な感想をこぼして。

全部壊れちゃえばいいのにね

ーアウグストウス視点ー

自分の管理する箱庭「楽園（Elysion）」を冠した世界へと魔法を使つて帰還する。

遠距離瞬間移動の魔法による浮遊感に身を任せて行き先を思い浮かべる。
テレポーション

堂々と自分があるじなのだから正面玄関のエントランスホールから

この思いをおくびにも出さず歩いて行こうか、

それともほとぼりが冷めるまでのんびり自分が築き上げた世界の一周旅行としゃれこもうか。

いや、ここは素直に自室で待っているであろう妻と子供たちに謝りに行こう。

怒っていてもいつかは許してくれるだろう。

きまぐれで、完璧な戦略の構築には天賦の才能を持っているけど色恋沙汰には疎い

1（恥ずかしながらこれは自分にも当てはまる）、

本当はとても優しい彼女に惚れ込んでしまったからには、

自身の役職の肩書き（世界の創造神）に恥じぬ働きをしよう。

強力な力を持っててもこの手からこぼれ落ちる砂の数は変わらない。

だからせめて、この手にすくえる砂粒だけでいいから守り抜こう。

そう決意して右手を握りしめた。

誠心誠意心を込めて謝って、それから笑顔で過ごせるように守ろう。

みんなの、だれかの笑顔を。

さらりと流れる髪にそつとくちづけた。

結局やっぱり素直に謝ろうと考えて本当にシンプルな自室のドアを開けた。

「ごめんなさい」

「ねえ、ユウ。通い妻のボクがひさしぶりにここに来たのに、
いったいどういうことなのさ」

入ってドアを後ろ手に閉めた直後に本能的な恐怖から部屋の主、

ひいては世界の管理者が土下座した。

フローリングに額をこすりつけながら最愛の人の笑ってはいるが、

目が笑っていない最悪の状態を想像してさらに恐怖で震える。

そういえば、彼女が自分のことを本名をもじったあだ名の『ユウ』
と呼ぶときは

本音をぶつけるときか自分の言うことを聞いて欲しい時だと

いまさらながらアウグストウスは思い出した。

彼の首筋と頬に金属のような冷たい物が少しだけあたる。

「ひっ」

ちらりと見ると当たったものは

彼女は普段から腰にさしている

『昔からの最高の相棒』と豪語するオレンジ色の鞘の刀だった。

彼の手と背筋からひやりとする汗が滑り落ちた。

「桜花、本当にごめん。ボクが悪かった。

大好きな姉ちゃんがこの世界に転生するってうえ（上層部）から聞かされて、

有頂天になって舞い上がった帰りにいろんなところにフラフラしてたから・・・その・・・」

彼の精一杯の事情説明を聞いて

彼女の普段は柔らかく高い声が低められて硬質な声に変わり、こう言った。

「ふうん。で？」

そして左手で彼に当てていた刀をどけて白い手袋をした手を添えて鞘におさめる。

彼は最悪の事態を覚悟した。

愛がなければ視えない想い出は・・・

「ふうん・・・ま、いいや。どうせ仕事でしょ？飽きたから、次はどこに行こうかなあ？」

しばらく首をかしげてうでを組んで考えた末に大きなマントを翻して窓際へと歩いた。

そして手にしていた刀を突如現れた黒い大きな穴に放り込んで窓を開けて、

サッシに手をかけて器用にサッシの上に飛び乗った。

「そんじゃ、またいつか」

飄々とした人を喰ったような調子で笑って一度だけ振り返る。

たんっ、軽い音がして窓の外の日がすっかり落ちた暗い世界へ彼女は飛び立つ。

彼女が飛び立った瞬間、息をするのも困難なほどの強風が部屋を渦巻いて

一人部屋に残された彼は立つことが難しくなって座り込んでしまう。数秒後には、どこにも彼女はいなくなっていた。

「あーああ。怒らせちゃったか・・・ま、いいや。そのうちまたふ

らつと来るさ」

パンパンと、服のホコリをはらって立ち上がる。

強風が吹いたにもかかわらず部屋はなぜかきれいなまま。

ふうー、とため息を付いてのびをしたら、

ひかえめで小さなノック音が彼の背後のドアからした後開かれた。

「おかーさん、入ってもいい？・・・ってアレ？おとーさん、おかーさんは？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3036m/>

テンプレ異世界物語を神の視点で見してみる。

2011年8月2日19時50分発行